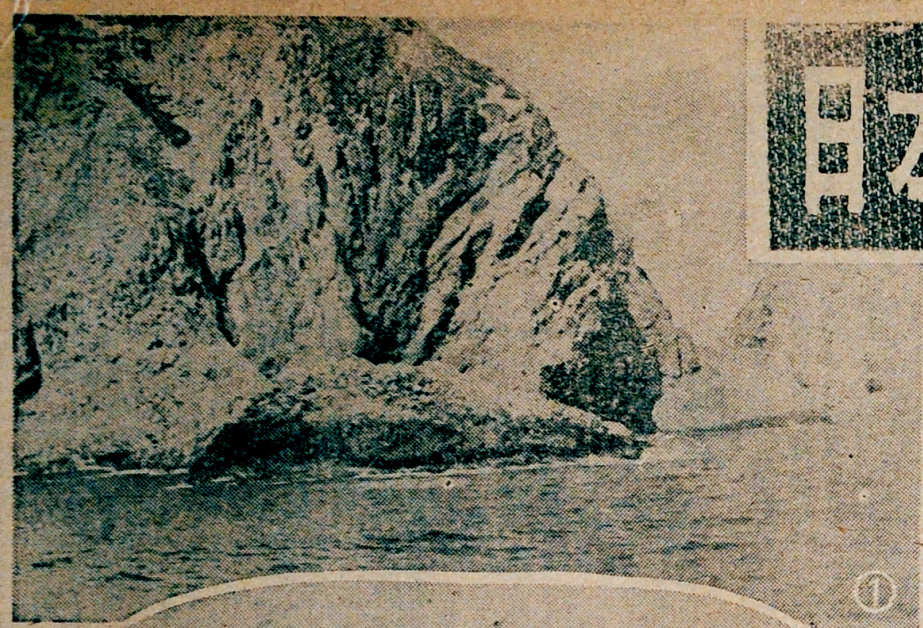
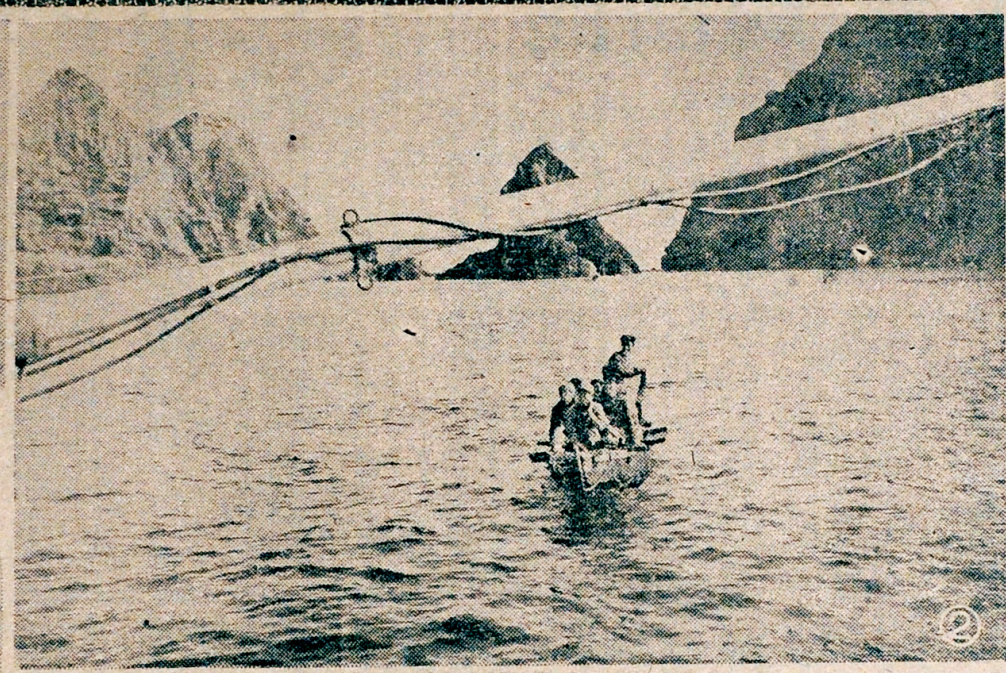
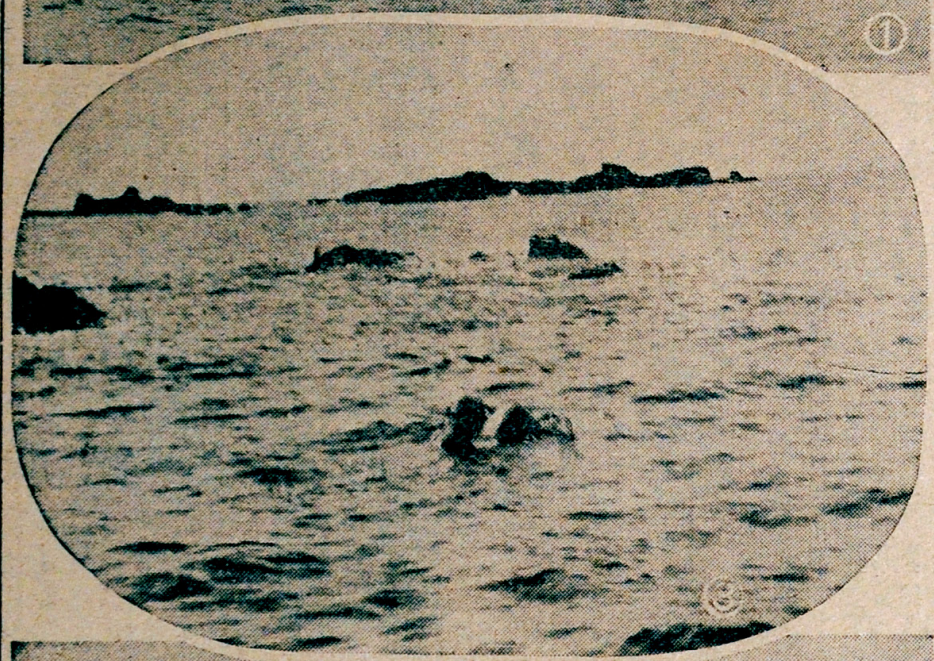
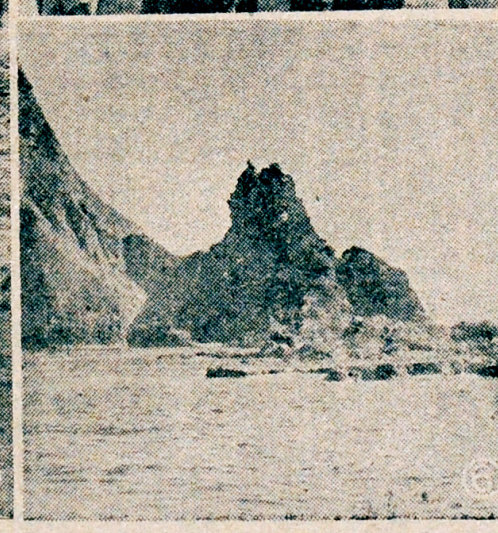
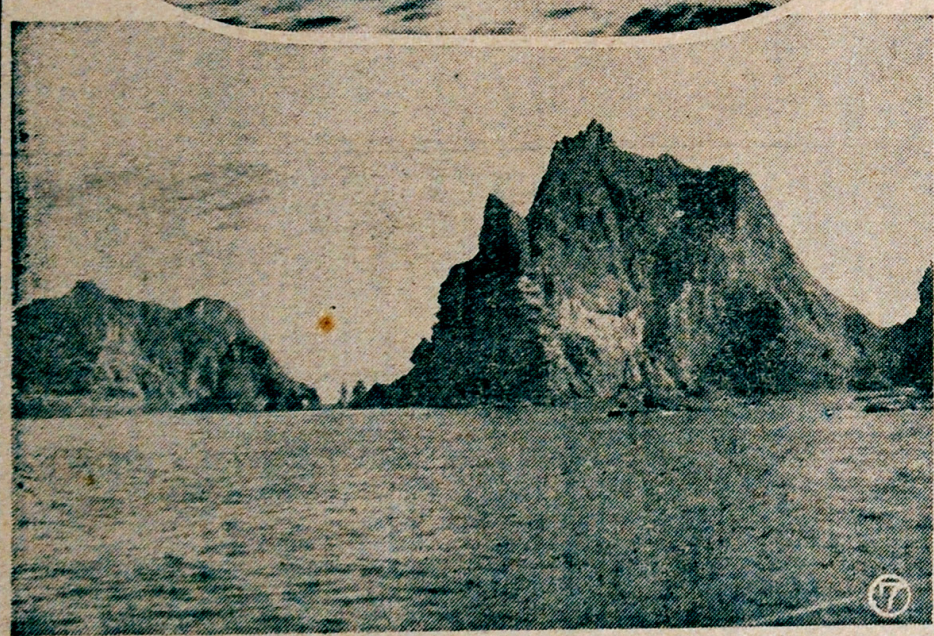
日本海の焦点・竹島上陸記











涙を流して日本慕う

▽▽▽▽▽▽

涙流して日本慕う

○…島を離れようとすると岩陰から鬱国人服の中年の女が飛び出して何やらわめく。船をこぐ青年がいやいやの手をふる。たずねると苦々しげに「日本に連れて行けというんです」と答えた。記者はしばらく両国の問題になつているこの竹島を考える。徳川時代松島と呼んだころは松でも生えていたろうが、あるいは明治中期に美校卒業の図材を求めて住んだ倉吉の中井金三郎位にきけばわかるかも知れない。それら数百年前からの先人の跡もいまは夢、日本国領土の標柱すら取除けられた日本の島に鬱国領土の石標が立ち、鬱人五十一名がすでに二十日あまりも住んでいるのだ。しかも国のバックがある。島の端で学生帽をかぶつた少年が「船を見学させて下さい」とはつきりした日本語でいう。承知して"だいせん"に連れていくと鬱陵島水産高校生で学費稼ぎのアルバイトにやつてきたが境に行きたいといいだした。新船長伊藤氏が境水産高校の先生だつたときいてから「先生、先生」といよいよ熱心になり「家の方はかまいませんから、勉強させて下さい」と目に涙をにじませて頼むのだつた。伊藤船長も困つた表情になり船上は一瞬しいんとなつた。人間としての共感はあつても国という垣が阻むのだ。かと思うと米軍給与の軍帽をかぶり、上衣に略綬をつけた名誉?の傷痍軍人は終始にこにこしているし、タバコを欲しがり正油をねだる連中もいた。一団の買株らしい四十年配の男は「十年ぶりで日本語を話した、忘れたと思つたが話せるね」「ひさしぶりですね」と愛きようふつたのち「日本も欲張らんで下さいよ、こんな小さい島オレの方が近いのだから」といつた。

鬱陵島からは五〇海里、隠岐から九〇海里という距離の差が彼の根拠らしい。いま鬱陵島には一万八〇〇〇人が住み軍需用の大きな罐詰工場があるという。そしてその近海はサンマの魚群が多いといつていた。彼らは口をそろえて五日目ごとに警備船がやつてくるという。「ちようど三日前にきたが、警備船が来たら恐ろしいから警備船のおる時は来ないがよい、危い」と話した。示威として受取るより親切と感じられる言葉だつた。「だいせん」の若い船員が正油を分けてやろうとすると貝を入れていたバケツを出す。そのバケツに半分ほど満たしてやると大喜びだつた。青年たちは伝馬船に移つて竹島へ帰る、こちらは隠岐をめざして発進する。相離れながら帽子をふり別れを惜しんだ。つかの間を語つたとも思えぬほどの懐かしさが国境、国語をこえて胸にじいんとひびく。境港に行きたいと泣いた高校生のげんめいにふる黒い帽子がしだいにかくなつてやがて小舟は島影に呑まれていつた。

写真 ①西の島南端の小島に群れるウミネコ②だいせんに笑顔で近づく六人の青年③ヒョウタンを浮かした済州島から出稼ぎの海女④西の島にいた鬱国少年⑤だいせん上の青年たち（右から二人目が略綬を帽び軍帽をかぶつた傷痍軍人）⑥西の島影にかくされた白い動力船（眞中やや右の白い横船）⑦北から望んだ竹島全景（前面の白点）＝いずれも田賀特派員撮影

日本海新聞（1954年6月3日）
鳥取県立図書館所蔵

抜去られた標柱

先人の跡もいまはユメ

【本社田賀特派員】日本漁船の進出を阻もうと、韓国が広大な海域を包む李承晩ラインを唱え、隠岐西北方九〇海里の竹島の領土権を主張した時、日本は朝野をあげて騒然とし、外交問題によつて解決をはかろうとした。以来李ラインをこえた日本漁船は韓国側に捕われ、船は没収、船員たちは懲役刑を受けつつある。だが竹島問題はいまや世人の眼から忘れ去られようとしている。しかしはたして韓国はその主張を放棄したであろうか、現実は全くそれとは逆な姿である。竹島にはいま韓国領の標識が刻まれ韓人が漁業を営んでいる。第八管区境海上保安部が数度にわたつて立てた日本国領土なる標柱はすでに跡方もない。一本の木もない西日本海の無人島ではあるが、漁業日本にとつては決して見すてることのできない「宝島」だ。記者は竹島の現実をみるべく折よくサンマ棒受網の試験操業を行う鳥取県水産試験場試験船「だいせん」に同乗、三十日同島に上陸した。以下は竹島上陸とその見聞記である。

△△△△△△△ 見えたぞ淡い島影

○…海図には竹島が二つある。隠岐西西北、鬱陵島南南東の問題の焦点となつている竹島であり、も一つは鬱陵島にある。隠川時代鳥取藩では前者の竹島は松島といわれ、鬱陵島を竹島といつたらしい。元和三年七月、(三百四十年前)米子の大屋甚吉が越後から帰りに漂着して発見し、竹島渡航を願出たのが鬱陵島のようだ。土肥漁労主任の指揮する試験船「だいせん」はサンマを追うて竹島に向つて南東から進んだ。二〇海里付近で淡い竹島の影が水平線にぼうッとかすんで見えだした。濃気のため双眼鏡でのぞいても全然見えない。電波探知機には魚群も海底も反応がない一、四六〇㍍の深海がつづいている。しばらく進むと電探に突然岩礁が現われた。一七〇㍍の線である。この層が七海里ほどつづいたあとまた底知れぬ断崖となつて一、三〇〇㍍線である。水平線上の竹島はしだいに藍色の影を濃くして伝説の鬼ガ島を思わせる。一片の陸地も見わたせない絶海の孤島が、いま日韓両国の領土権主張の中心とは思えないほどだ。五〇〇㍍ぐらいまで接近したが双眼鏡にすら人影は映らぬ。だが落砲される危険があるというのでそれ以上近づかず旋回に移つた。南端と北端の洞門が白つぽく空をのぞかせる。

だいせんは針路を西にとつた。島を南から西へ回ろうとするのだ。と東島と西島の中間地帯に竹ザオが動く。船だ。伝馬船に乗つてワカメを取つている船が二隻いる。そこは直立する奇岩の群が涌蓋海岸の絶景よりもすばらしい。海ネコが空を舞つて鳴く。無数の鳥だ。おそらく数千羽、小島に群つたり、西島一八七㍍の絶頂から一本の木もない島の断崖やひだのみどりの草に白色を綾つてあるいは飛び、あるいは群り海ネコの島といつてもよいほどだ。

▽▽▽▽▽▽▽ 近づき寄る伝馬船

○…西に向つて針路を北に向けるといういる岸辺に赤い色どりの人間が点々と散らばつている。「女だ」一瞬意外な感じがおこる。荒海を乗りこえてくるのは男ばかりだ。と思つていた記者の予想はみごとにはずれた。どこの岩かげから射たれるかわからないと思うと船橋に弾丸の穴でもあけられたような幻覚に襲われる。だが島の人影は海草とりにけんめいのようだ。水際から上つて船を見ている姿もある。さつと数えて三十人。西北に散在する一〇〇㍍ぐらいの低い岩礁を回つたところで突然目の前に水しぶきがあがつた。アンカが三頭泳いでいる。一度黒い姿を見せたまま再び現われなかつた。昨年は三〇頭ぐらいだというから捕われたのかも知れない。岩かげに小旗をひるがえした真白な動力船がモヤつている。七、八人ぐらいの船だ。北面に回ると西島の岩崩れした水辺に白ペンキで韓国旗がえがかれている。そのかたわらの字はおそらく大韓民国という字であろう。だいせんは海底の奇岩を避けて一周する。こゝまできて上陸せずに帰るのは残念だ。土肥漁ろう主任、初航海の新船長伊藤康夫氏に頼んでもう一度回つてもらう。

と東島の西南、わずかな平地にドラム罐が見え、ワカメの干場が見える。そのやや上に石なのかセメント様の標柱がある。韓国領土というしるしだと後でわかつた。一〇〇㍍ぐらい接近しても小島に群る海ネコは飛び立とうとしない。二度目西側へ回ると人数は前よりふえてきた。北側で停船すると西島の岩陰から伝馬船がこぎ出してきた。韓国軍か官憲か、漁夫か、かたずをのむうちに手を振りはじめる。交歓にくるかも知れないとホッとする。近づいた船には廿五才前後の青年が六人乗つていた。笑いかけるから敵意はないとやや安心した。と東島からまた一隻の伝馬船が近づいてくる。油断ゑさせて「手を上げろ」ではなかろうかと心配になる。だが思い切つて「島に運れて行け」というと「オーケー」アメリカ仕込であつさり承知してくれた。

△△△△△△△ 単身島へ乗り込む

○…記者が一人で島へ行くことになつた。単身韓国人の多勢いるところへ、しかも両国の問題になつている島へ行くには悲壮な感さえわく。韓国人の伝馬船に飛び乗ると早速タバコだ。タバコを分けてから青年たちと話をはじめたが、ほとんどの青年が日本語を話す。「韓国軍に召集され戦争に出た。負傷して帰つたが食えないから傷病軍人会の援助でワカメ採りに鬱陵島からやつて来た。もう二十日余りになる。発動船一隻と小船四隻がいる。島には男が二十三人、女が二十八人いる。女のうち済州島からきたのが二十人ばかりだ」数人の口からこれだけ聞いたとき竹島についた。あちらこちらの小島に休んでいた裸の女が一せいに水にもぐつた。男を養う海女で有名な済州島の女たちである。カメラを向けると潜つてしまう。青谷の夏柏の海女は息笛がピューンとひびくが、ここではフォーッと小さくため息に似ている。男たちは二間余の竹の先に鎌をつけて海中のワカメをとつているが、海女は頭大のヒョウタンを浮かせアワビやサザエを獲つている。黒パンツをのぞかせて潜り込んだら三分ぐらいは出てこない。波をかぶらない岩という岩にはワカメが七、八寸から一尺四、五寸ぐらいの長方形にして干されている。

△△△△△△△ 石コロの上が住家

○…海女の群を過ぎると三十才ぐらいの女が破れた白パンツをはいて水際で小貝を採つている。副食にするらしい。その手は岩で切つたらしく傷だらけで赤チンを塗つていたが写真機を見ると岩陰にかくれてしまつた。西島の西岸に上つた。そこはやや長い海岸線で六、七〇㍍はあろう。巾は二㍍から五㍍ぐらい。海と絶壁にはさまれたに言りこぶし大の石ころの原だ。その上に絶壁に沿うてムシロやゴザが敷いてあるのが住居だ。その後の絶壁は必ず奥深い洞穴で雨露をしのぐところだが、生活の大半は石ころの上で炊事もその岩かげで行われる。一本もない島だから警備船が補給しても薪には困るらしい。そこで日本国領土という海上保安部の五寸角の木柱はちようど手頃な薪になつたか、どこにも影さえない。留守の妻が洗たくしたのだろう白いシャツが岩に干してある。見上げる断崖の上に海ネコが二羽よりそうて白い腕をならべている。ギガたる島、草のほかは陸上には何物も生えぬ島、その島にいる人影は太古海辺に住んだ原始人を想像させる。

韓国人はこの島をドク島と呼んでいるそうだ。東の島は低いがまわりが大きいので大島といい高い西島を小島という。季節風も韓国では十貫目が一万円だという。氷は豊富にあつて五斗で三、五〇〇円というからけつこういい商売になるらしい。だがこの絶海の孤島にはるばる済州島から女が出稼ぎするのは果して勇敢だからだろうか。女は大てい日本語を知らない。海女たちの赤銅ひかりする肌、はずむような乳房の隆起を潮の玉と五月の陽がすべる。一ツ目の水中目鏡は日本の海女と同じだ。どの海女も豊かな肉体美の片りんを水上にのぞかせて目鏡の中で二笑つている。

逞ましい海女

空に舞う無数の海ネコ

ワカメは赤茶けた色で上物ではない。そんな赤茶けたワカメで

の西風が吹かず陽当りもよいのでみんな両島の西南岸に起居している。

日本海新聞（1954年6月3日）
鳥取県立図書館所蔵